

児童が主体的に英語を学び、学びをコミュニケーション活動に生かそうとする授業を目指して

—外国語科における学習者用タブレットによる学習記録の蓄積と活用を通して—

栗原市立宮野小学校 高橋 有紗

1 授業づくりに関わる課題

4月に第5学年の児童に行った実態調査（表1）では、児童全員が「外国語の授業が楽しい」と感じていた。その一方で、「どんな学習をするか理解して取り組んでいますか」という質問への回答からは、学習の見通しを持つことができていない児童がいることがうかがえた。また、「授業の終わりに学習した英語が話せるようになったと感じますか」という質問への回答からは、「学習した英語を話すことができた」という達成感を感じることができていない児童が多いことが分かった。

表1 児童へのアンケート（令和4年4月実施、n=10）

質問	A	B	C	D	E
A：とてもそう思う B：そう思う C：あまりそう思わない D：そう思わない E：分からない 【単位：人】					
外国語の授業は楽しいですか	8	2	0	0	
どんな学習をするか理解して取り組んでいますか	2	5	2	1	
授業の終わりに英語が話せるようになったと感じますか	3	2	2	0	3

さらに、授業中の児童の様子からは、既習の英語表現が身に付いていないために、英語でのやり取りがスムーズに進まなかったり、「学習した英語を使ってやり取りできた」という達成感が得られなかったりしている様子が見られた。

以上の課題から、児童が単元のゴールを理解し、進んで言語材料を増やしていこうとしたり、学んだことを互いにやり取りするコミュニケーション活動に生かしていこうとしたりするための手立てを教師が講じていくことで、児童が主体的に英語を学び、外国語の学習の中で「英語で伝えることができた」という達成感を感じるようになる考えた。

2 研究の目的と方法

(1) 研究で目指す児童の姿

研究主題「児童が主体的に英語を学び、学びをコミュニケーション活動に生かそうとする授業を目指して」について目指す児童の姿を次のように考えた。

① 「主体的に英語を学ぶ」児童の姿（以下、「目指す児童の姿1」）

単元のゴールを意識し、自ら活用できる言語材料

を増やそうとしている姿や、自分が学んだことをタブレット端末に音声等で記録して学びの様子を振り返り、自分なりの目標を持って学習に取り組もうとしている姿と考えた。

② 「学びをコミュニケーション活動に生かそうとする」児童の姿（以下、「目指す児童の姿2」）

「伝えたい」「知りたい」という思いを持ち、進んで教師や友達とコミュニケーションを図ろうとしている姿や、タブレット端末に音声等で記録した自分の学びを次の活動に生かそうとしている姿と考えた。

(2) 研究の手立て

(1)で示した児童の姿を目指し、2つの手立てを講じていくこととした。

① 児童が単元のゴールを意識し、自分の目標を持って学習に取り組むための指導の工夫（以下、「手立て1」）

単元や授業の始めに単元のゴールを提示することで、児童が目標を持って学習に取り組めるようにする。また、授業の始めにロイロノート（学習環境支援システム、以下、「ロイロノート」）を活用して、単元で扱う言語材料（絵カード等）を児童に配布し、学習課題を児童と確認したり、単元を通してどのような英語が話せるようになるのかという見通しや目標を持たせたりする。

授業の終わりには、話せるようになった英語を児童に音声で記録させる（以下、「学習記録」）。毎時間学習記録を蓄積させていくことで、話せる言語材料が増えていくことを目に見える形で児童に示し、達成感を味わわせるようにする。また、児童に自分の学びの状況を実感させることで、自分に合った次時のめあてを持たせるようにする（図1）。

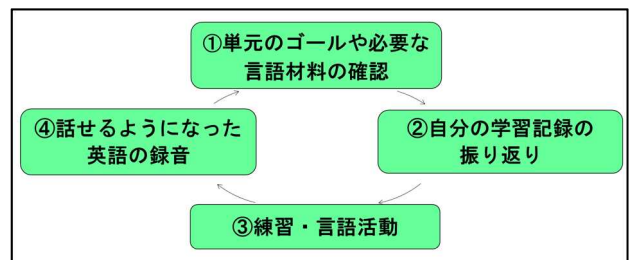


図1 言語材料の提示と学習記録の活用と蓄積のサイクル

② 児童が自分の学びをコミュニケーション活動に生かすための指導の工夫（以下、「手立て2」）

授業の始めに、前時までの学習記録を振り返る時間を設定し、児童に前時までに自分が話せるように

なった英語を確認させることで、学習した英語を本時の活動に生かすことができるようにする。児童が話したい英語が分からない時にも、学習記録を活用できるようにする。また、児童が意欲的にコミュニケーション活動に取り組めるようにするため、児童の実態に合ったコミュニケーションの場や題材の設定を工夫する。

3 授業実践Ⅰの取組

(1) 単元について

単元名「Unit3 What do you want to study?」

（東京書籍 NEW HORIZON Elementary 5）

(2) 単元を通して目指す児童の姿

本単元で目指す児童の姿1を、単元のゴールの活動である「夢に近づく時間割」を伝え合うために、教科や職業について話せる英語を増やそうとする姿や、授業の終わりに話せるようになった英語を記録して自分の学びの状況を振り返ろうとする姿とした。

また、目指す児童の姿2を、学習記録を活用し、前時までに学んだ英語を生かして自分の思いを伝えようとする姿とした。

(3) 具体的な手立て

① 手立て1について

第1時に、教師やALTが「夢に近づく時間割」を紹介することで、児童が単元のゴールを意識しながら学習に取り組むことができるようにする。また、単元の学習に必要な英単語として、教科を表す英語（Japanese/math など 11 単語）と職業を表す英語（singer/vet など 24 単語）の絵カードを、ロイロノートを活用して児童に配布する。また、英語表現として「学びたい教科を伝える（I want to study math. など）」「学びたい教科を尋ねる（What do you want to study?）」「なりたい職業を伝える（I want to be a singer. など）」「なりたい職業を尋ねる（What do you want to be?）」を一つ一つカードに示し、児童に配布する。授業の終わりには、児童に話せるようになった英語を録音させ、学びの様子を実感させたり、次時以降の学習の目標を持たせたりする。

② 手立て2について

毎時間の授業の始めに単元のゴールを確認した後、学習記録を振り返らせる時間を設ける。前時までに自分が録音した英語を聞いて繰り返して言わせるようにし、児童が本時の学習に生かすことができるようにする。コミュニケーション活動の中で児童が話したい英語が分からない時にも、学習記録を活用できるようにする。また、児童のコミュニケーション活動への意欲を高めるために、学びたい教科を尋ね合う活動の後に、「みんなが『学びたい教科ランキング』にまとめる」などの目的を提示する。

(4) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

① 手立て1について

- 単元や授業の始めに、教師やALTが「夢に近づく時間割」を紹介した時に、「サッカー選手なら体育をたくさん勉強した方がよい」などの児童の反応が見られたことから、児童が単元のゴールを理解したり、『夢に近づく時間割』を考えたいという意欲を持ったりすることができた様子がうかがえた。また、模造紙やロイロノートで単元の学習の流れを示したことで、本時では何を学習し、どのような英語が話せるようになるのかということを児童が意識して学習に取り組むことができた。

- 話せるようになった英語を録音させることで、児童は「話せるようになった英語が増えてうれしい」という気持ちや「話せる英語をもっと増やしたい」という気持ちを持つことができた（表2）。

表2 児童へのアンケート（令和4年7月実施、n=10）

話せるようになった英語を録音するとどんな気持ちになりましたか（複数回答、10名中）	
話せるようになった英語が増えてうれしい気持ち	6人
話せる英語をもっと増やしたいという気持ち	4人
まだ話せない英語があることが分かり、次も頑張りたいという気持ち	2人
まだ話せない英語があることが分かり、がっかりした気持ち	1人
思うように録音できなくて、くやしい気持ち	0人

- 授業の終わりに話せるようになった英語を録音させる際に、十分な時間を確保することができなかったことがあった。また、前時の記録と比較させたり感想につなげさせたりすることができなかった。
- 実態調査の「英語を話せている自信がありますか」という質問に対して、「あまり自信がない」「自信がない」と回答した児童が合わせて4名いた。しかし授業中の児童の様子を見ると、学習した英語を使ってやり取りができていることから、どのような姿を「英語を話せている」とするのかということについて、教師と児童の間で認識のずれがあったことが考えられる。児童が「学習した英語を話せた」という実感を持つことができる手立てを再検討していく必要がある。

② 手立て2について

- 児童は、自分の学習記録を積極的に活用していた（表3）。

表3 児童へのアンケート（令和4年7月実施、n=10）

質問	A	B	C	D	E	F
A：使って役に立った B：使ってまあまあ役に立った C：使ってあまり役に立たなかった D：使って役に立たなかった E：使わず役に立たなかった F：使わなかったがあれば助かる 【単位：人】						
学習記録は自分の学習の役に立っていますか	7	1	1	0	0	1

- 「もし2時間だけ自分で時間割が決められたとしたら」など具体的な場面を設定したことで、児童が自分の考えを持ってコミュニケーション活動に取り組むことができた。

- 学びたい教科について尋ね合わせた時には、やり取りの後に『みんなが学びたい教科ランキング』にまとめる」という目的を提示したことで、児童は「体育が一番だと思う」「家庭科かもしれない」と予想を立てて、意欲的にやり取りをしていた。

4 授業実践Ⅱの取組

(1) 単元について

単元名「Unit5 Where is the post office?」

（東京書籍 NEW HORIZON Elementary 5）

(2) 単元を通して目指す児童の姿

本単元で目指す児童の姿1を、児童が『夢の Miyano Town』を考えて、おすすめしたい場所を案内する」というゴール活動に向かい、道案内に使う英語の中から話せるものを増やそうとしたり、自分の学びの様子から自分なりの目標を持って学習活動に取り組もうとしたりする姿とした。

また、目指す児童の姿2を、児童が英語を使ってやり取りする際に、前時までに学習した英語を活用してやり取りしようしたり、自分の思いをより正しく伝えようとしたりする姿とした。

(3) 具体的な手立て

① 手立て1について

授業実践Ⅰと同様に、タブレット端末を活用して単元の言語材料を児童に示したり、授業の始めに単元のゴールを確認したりして、どんな英語が話せるようになるのかという見通しを持たせる。単元の学習に必要な英単語として、建物を表す英語（park など27単語）と道案内に関わる英語（right/turn など7単語）の絵カードを、ロイロノートを活用して児童に配布する。また、英語表現として「公園はどこですか（Where is the park?）」「右に曲がってください（Turn right.）」「左側に見えます（You can see it on your left.）」などを絵カードに示し、児童に配布する。毎時間の授業の終わりには児童が話せるようになった英語を録音させ、学習記録を蓄積する。

授業実践Ⅰの課題として、児童が「学習した英語を話せた」という実感を持つことができる手立ての再検討が挙げられた。児童が自分の目標の達成度を実感できるように、コミュニケーション活動に対して自分なりの目標を持ち、目標達成に向かって自分の力で英語を話す「チャレンジタイム」を単元の中で3回設定する。コミュニケーション活動の目標を児童に明確に持たせることで、活動後の振り返りの際に、英語を話せたかどうかを自分自身で適切に判断できるようにする。そうすることで児童に「自分の力で英語を話すことができた」という思いを持たせることにつなげていく。

② 手立て2について

毎時間の授業の始めに学習記録を振り返らせる時間を設定することで、児童に前時の自分の学びの状

況を振り返らせたり既習表現の復習をさせたりして、児童が自分の学習記録を本時の学習に生かしていくことができるようにする。また、授業実践Ⅰでは、児童同士でのコミュニケーション活動の中で英語が分からなくなった時の解決手段として学習記録を活用してもよいこととしていたが、授業実践Ⅱでは、「チャレンジタイム」の時に児童が自分の話せる英語を使って相手に伝えることを目指すため、学習記録の活用場面を意図的に制限する。

コミュニケーション活動として、単元を通して道案内の活動を行うが、道案内の活動では、聞き手の児童が行きたい場所の位置が分からないという場面設定が必要となる。そのため、情報の出し方を工夫する。

(4) 成果と課題（○：成果 ●：課題）

① 手立て1について

- 教師が毎時間の授業の始めに、「夢の Miyano Town」にあるとよいと思う施設を一つずつ提示したことにより、児童がゴールのイメージをより具体的につかむことができた。また、「今日はどんな施設が増えるのだろう」「水族館だと思う」といった反応を示しながら教師の道案内を聞いていたことから、児童の活動への意欲を高められたと思われる（表4）。

表4 児童へのアンケート（令和4年11月実施、n=10）

質問	A	B	C	D
A：とても思う B：そう思う C：あまりそう思わない D：そう思わない 【単位：人】				
授業の始めに先生の『夢の Miyano Town』の案内を聞いて、これからどんな活動をするか理解できましたか	7	3	0	0
教師の道案内を見て、自分もやってみたいという気持ちになりましたか	5	5	0	0

- 授業の終わりに話せるようになった英語を録音させる時に、「道案内の活動をした中で、上手に話せたと思う英語を記録しましょう」と指示を出したことで、児童の実際の活動が生かされた学習記録となった。
- 単元の中で「チャレンジタイム」を3回設定したことで、児童が自分の話せる英語を活用して相手に伝えるように道案内をするという目標を持って活動する姿が見られた。また、「次時の活動ではもっとすらすらと英語を話したい」などの目標を持つことにもつながった。

② 手立て2について

- ロイロノートを活用し、授業の始めに言語材料や英語表現の確認を行ったことで、児童に英語が定着し、活動がスムーズに進んだ。また、復習として学習記録を聞かせることで、児童が自分の学びを次の活動に生かすことができた。
- 児童が考えた「夢の Miyano Town」の中から、自分が特に案内したいと思う場所を3つ選ばせ、それについては地図上に表さず「おすすめの場

所紹介カード」に文章で書かせた。聞き手の児童には、相手に尋ねる前に「おすすめの場所紹介カード」を見るようにさせ、自分が行ってみたいと思った場所の位置を尋ねるようにした。そのことが、児童の「知りたい」「伝えたい」という思いにつながり、道案内の活動に必要性が生まれた。

- 授業の始めに学習記録を活用するには時間が必要なため、どの学習記録を活用させるか吟味するとよい。また、コミュニケーション活動の時間を多く確保できるようにする。

5 まとめ

(1) 研究の成果

研究を通して、研究主題にある「児童が主体的に英語を学び、学びをコミュニケーション活動に生かそうとする」姿を達成することができたかを検証した。

① 目指す児童の姿1について

単元や授業の始めに単元のゴールや扱う英語を提示したことで、児童が目標を持って学習に取り組めるようになった。また、学習記録を蓄積し、児童の学習の成果を目に見えるようにしたことで、児童に「話せる英語が増えた」「話せる英語をもっと増やしたい」という思いを持たせることができた（表5）。

表5 児童へのアンケート

（令和4年4月と11月の比較, n=10）

どんな学習をするか理解して取り組んでいますか		
	4月	11月
よく理解している	2人	7人
理解している	5人	3人
あまり理解していない	2人	0人
理解していない	1人	0人
授業の終わりに英語を話せるようになっていますか		
なっている	3人	7人
どちらかといえばなっている	2人	3人
あまりなっていない	2人	0人
なっていない	0人	0人
分からない	3人	0人

さらに、授業づくりの課題の一つとしていた、児童に学習を通して達成感を味わわせることについては、実態調査の「授業の中で、『できた』『分かった』という達成感を感じますか」という問いに、6名の児童が「感じる」、4名の児童が「どちらかというと感じる」と回答した。

児童が単元のゴールを意識して、自分が話せる英語を増やしていこうとした姿や、自分の苦手な表現を把握した上で練習していた姿から、児童が主体的に英語を学ぶことができたと考えた。

② 目指す児童の姿2について

実態調査（表6）から、学習した英語を次の学習に生かそうとしている児童が増えたことが読み取れた。学習記録を蓄積してきたことで、児童が授業の

始めに、前時の自分の学びを振り返って本時の学習に生かすことができた。毎時間学習記録を活用してきたことで、単元で扱う英語が定着しやすくなり、コミュニケーション活動が円滑に進んだ。このことが、英語を話すことに楽しさを感じる事ができた児童が増えた理由の一つであると考えた。

表6 児童へのアンケート

（令和4年4月と11月の比較, n=10）

前に学習した英語を、次の学習で使おうとしていますか		
	4月	11月
している	4人	5人
どちらかといえばしている	4人	5人
あまりしていない	2人	0人
していない	0人	0人
英語を話す活動は好きですか		
とても好き	5人	7人
どちらかといえば好き	5人	3人
あまり好きではない	0人	0人
好きではない	0人	0人

また、学習記録は、児童自身が自分の学習の役に立ったと感じることができるようになった（表7）。授業実践を振り返り、児童一人一台のタブレット端末を外国語の授業に生かしていくことは、児童の学習意欲を高めたり、話せる英語を増やしたりすることに有効であったと考える。児童が1時間の中で学んだことを次時の学習につなぎ、更に単元を通してコミュニケーション活動に生かしていくことができる点に効果があった。

以上のことから、児童が学びをコミュニケーション活動に生かそうとすることができたと考えた。

表7 児童へのアンケート（令和4年11月実施, n=10）

学習記録は自分の学習の役に立っていますか	
とても役立っている	9人
どちらかといえば役立っている	1人
あまり役立っていない	0人
役立っていない	0人
【理由】	
・毎回、学習記録が増えてうれしかった。	
・忘れてしまった英語を思い出すことができた。	
・学習記録を使って繰り返し練習したことで、英語を覚えることができた。	

(2) 今後の課題

① 学習記録の活用について

これまでロイロノートを活用し、単元ごとに学習記録を蓄積させてきた。今後は、単元をまたいで児童が活用できる手立てについて検討していく。

② 評価について

ロイロノートを使って児童に提出させた学習記録を、教師の評価材料の一つとして生かすことができた。今後は児童への効果的なフィードバックの仕方を探っていきたい。また、児童の文章や自己評価での振り返りとどのように併用していくかも考えていきたい。